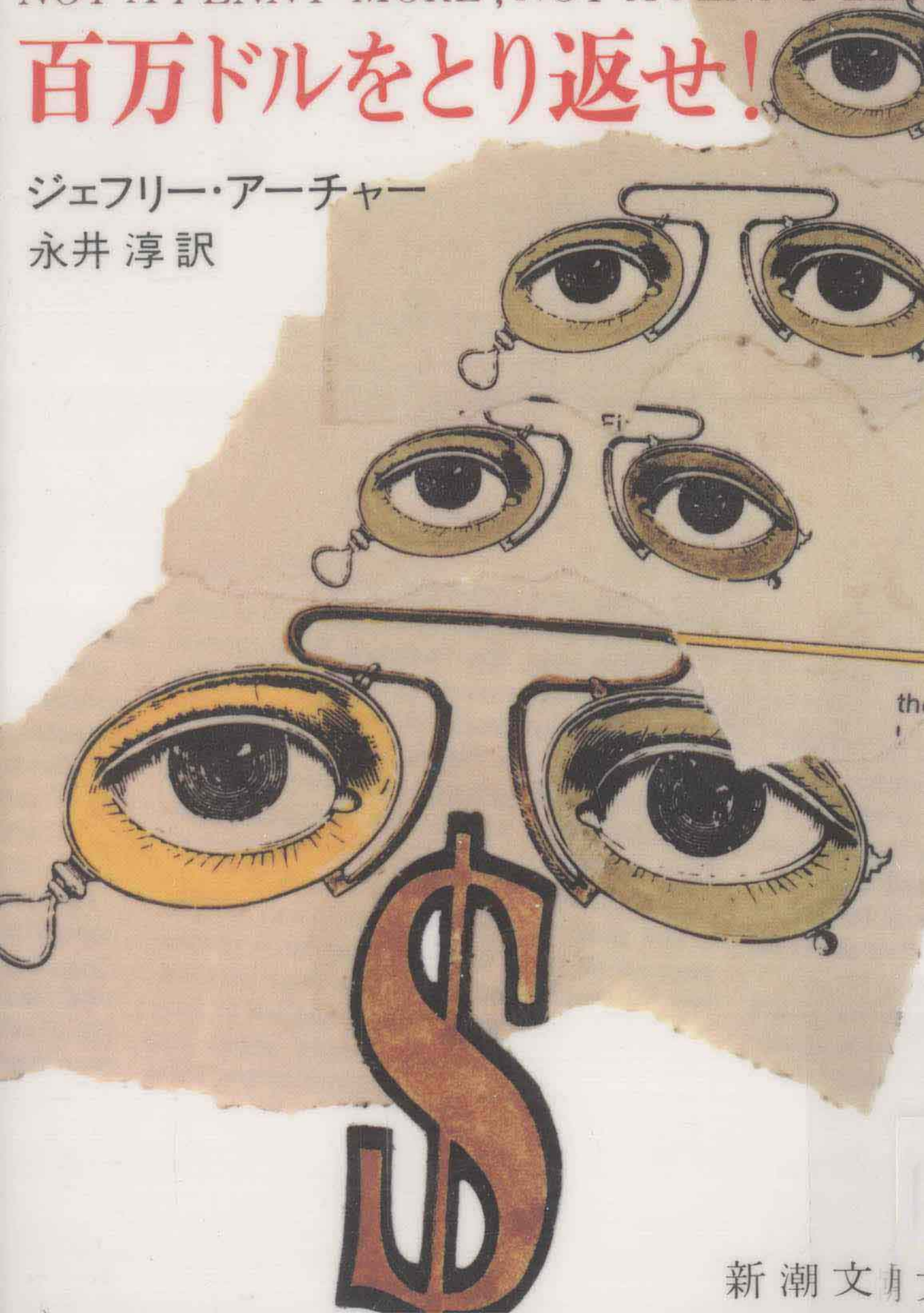
NOT A PENNY MORE, NOT A PENNY LES

百万ドルをとり返せ!

ジェフリー・アーチャー
永井淳訳



新潮文庫

Title : NOT A PENNY MORE, NOT A PENNY LESS
Author : Jeffrey Archer
Copyright © 1976 by Jeffrey Archer
Japanese translation rights arranged
with Jeffrey Archer c/o Deborah Owen Literary Agent, London
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

百万ドルをとり返せ！

新潮文庫

Published 1977 in Japan
by Shinchosha Company

昭和五十二年八月三十日　発行
平成　五　年九月十五日　五十二刷改版
平成十二年一月二十日　六十五刷

訳者　永井淳
発行者　佐藤隆信
発行所　株式会社新潮社

郵便番号　一六二―八七一一
東京都新宿区矢来町七一
電話編集部（〇三）三二六六―五四四〇
読者係（〇三）三二六六―五一一一
振替　〇〇一四〇―五―八〇八

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・東洋印刷株式会社　製本・株式会社大進堂
© Jun Nagai 1977　Printed in Japan

新潮文庫

百万ドルをとり返せ！

シェフリー・アーチャー
永井　淳訳

2421

百万ドルをとり返せ！

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

主要登場人物

ハーヴェイ・メトカーフ……一代で身代を築いた億万長者
デイヴィッド・ケスラー……プロスペクタ・オイルの新入社員
スティーヴン・ブラッドリー……オクスフォード大学の客員フェロー
ロビン・オークリー……上流階級専門の医師
ジャン＝ピエール・ラマン……フランス人の画廊経営者
ジェイムズ・ブリグズリー……イギリス貴族の御曹子
アン・サマートン……美人モデル
クリフォード・スミス……スコットランド・ヤード詐欺捜査課警部

感謝のことば

本書の執筆に当ってさまざまな援助を受けた左記の方々に感謝の意を表したい。執筆をすすめたデイヴィッド・ニーヴン・ジュニア、執筆を可能にしたサー・ノエルとレディ・ホール、それにエイドリアン・メトカーフ、アンソニー・レントゥール、コリン・エムスン、テッド・フランシス、ゴドフリー・バーカー、ウィリー・ウェスト、マダム・テレゲン、デイヴィッド・スタイン、クリスチャン・ネッフェ、ドクター・ジョン・ヴァンス、ドクター・デイヴィッド・ウィーデン、レズリー・スタイラー師、ロバート・ガッサー、ジム・ボルトン教授、ジェイミー・クラーク、まとめを手伝ってくれたゲイルとジョー、そして原稿の訂正と編集に多くの時間を費やした妻のメアリに。

メアリと
太った男たちに

この作品は創作である。人名、登場人物、場所、事件などは、すべて作者の想像力の産物か、フィクションとして利用されたもので、実在の人物や場所や事件に似ているとしてもまったくの偶然である。

プロローグ

「イェルク、今夜中部ヨーロッパ標準時の六時までに、クレディ・パリジアンからナンバー・ツーの口座に七百万ドル払いこまれる。その金をあすの朝までトリプルAクラスの一流銀行に預けるか、ユーロ・ダラー・マーケットに一晩投資してくれ。わかったか？」

「わかったよ、ハーヴェイ」

「リオ・デ・ジャネイロのバンコ・ド・ミナス・ジェライスに、シルヴァーマンとエリオット名義で百万ドル預け、ロンバード・ストリートのバークレイズ・バンクのコール・ローンをキャンセルするんだ。わかったか？」

「わかったよ、ハーヴェイ」

「わしの商品口座で一千万ドルに達するまで金を買い、つぎの指示があるまで待て。なるべく底値で買うのだ。絶対に買い急ぐなよ――辛抱強くやれ。わかったか？」

「わかったよ、ハーヴェイ」

ハーヴェイ・メトカーフはこの最後の指示が余計だったことに気がついた。イェルク・ビルラーはチューリヒでも最も慎重な銀行家の一人だったし、ハーヴェイにとってはそのほう

がより肝心だが、過去二十五年間の実績が最も抜目のない銀行家の一人であることを証明していた。

「六月二十五日、火曜日の二時に、ウィンブルドンのセンター・コートにあるいつものわしの株主席にこられるか？」

「行けるとも、ハーヴェイ」

いきなり電話が切れた。ハーヴェイはさよならをいわない男だった。人生の機微というものをまるで解さない人間で、いまさら人並みにやろうとしても手遅れだった。彼はふたたび電話を取りあげて、ボストンのリンカーン・トラストにつながるはずの七桁の数字を回し、秘書を呼びだした。

「ミス・フィッシュか？」

「はい、そうです」

「プロスペクタ・オイル関係のファイルを抜きだして処分してくれ。その関係の通信はすべて処分し、いかなる痕跡も残すな。わかったな？」

「はい、わかりました」

ふたたび電話がぷつんと切れた。ハーヴェイ・メトカーフが同じような命令をくだすのは、過去二十五年間でこれが三度目だったので、いまではミス・フィッシュも万事心得ていて余計な質問をしなかった。

ハーヴェイは深々と、ほとんど溜息に近い深呼吸をした。静かな勝利の吐息である。いま

や彼は少なく見積っても二千五百万ドルの資産家で、もはや何物も彼を引きとめることはできなかった。ロンドンのヘッジズ・アンド・バトラーから輸入された一九六四年もののクリューグ・シャンペンをあけてゆっくり味わいながら、一カ月に一度の割で、あるイタリア移民の手をへて、二百五十本入りの箱でキューバから密輸されるロメオ・イ・フリエッタ・チャーチルに火をつけた。それから椅子の背にもたれて、ひとりささやかに祝った。マサチューセッツ州ボストンでは、いま午後十二時二十分――ほぼ昼食の時間だった。

ハーレー・ストリート、ボンド・ストリート、キングズ・ロード、それにオクスフォードのモードリン・カレッジでは、いま午後六時二十分だった。たがいに縁もゆかりもない四人の男たちが、《ロンドン・イヴニング・スタンダード》の最終版でプロスペクタ・オイルの株価をチェックした。株価は三ポンド七十シリングだった。四人が四人とも金持で、それまでに築きあげた輝かしい経歴をいっそう確かなものにすることを夢見ていた。あすは文無しの身だとも知らずに。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

1

百万ドルを合法的に稼ぐのは常にむずかしい。法の裏側で百万ドルを稼ぐのはそれより少しやさしい。稼いだ百万ドルを持ちつづけることが、おそらくはいちばんむずかしい。ヘンリク・メテルスキはこの三つともやってのけたまれな人間の一人だった。合法的に稼いだ百万が、法の網の目をくぐって稼いだ百万よりあとからきたものだったとしても、メテルスキは依然としてほかの人間を一歩リードしていた。どちらの百万も持ちつづけていたからである。

ヘンリク・メテルスキは一九〇九年五月十七日に、ニューヨークのローワー・イースト・サイドの、すでに四人の子供が寝ている狭い部屋で生れた。彼は神を信じ、一日一食で満足しながら、大恐慌の時代に成長した。両親はワルシャワ出身のポーランド人で、世紀の変り目にアメリカに移住した。父親はパン職人だったので、ポーランド移民が同胞相手の黒いライ麦パンの製造と小さなレストラン経営を独占しているニューヨークで、間もなく職にありついた。両親ともにヘンリクが学問で身を立てることを望んだが、ハイスクールでは目立たない生徒だった。彼は狡賢い少年で、独立戦争や自由の鐘の感動的な逸話よりは、校内の煙草や酒の闇マーケットにより大きな関心を示した。ヘンリク少年は人生における最上のも

のが無料で手に入るとは思っていなかったから、彼にしてみれば金と権力の追求は猫が鼠を追うように自然なことだった。

ヘンリクがニキビだらけ、生意気ざかりの十四歳になったとき、父親がいまでいう癌で死んだ。母親もその数カ月後にあとを追い、五人の子供たちは自活の道を講じなければならなくなった。ヘンリクもほかの四人と同じように、当然その地区の孤児院に収容されるはずだったが、一九二〇年代なかばのニューヨークで一人の少年が行方をくらますのはさしてむずかしいことではなく――むしろ問題はどうやって生きのびるかということだった。ヘンリクは生存競争の達人になったが、この実地教育はのちに大いに役立つことになる。

ヘンリクは空きっ腹を抱え、目をぎらぎらさせてローワー・イースト・サイドをうろつきまわり、あちらで靴を磨いたり、こちらで皿を洗ったりしながら、その中心に富と威信が隠されている迷路の入口を捜しまわった。彼の最初のチャンスは、ニューヨーク株式取引所のメッセンジャー・ボーイ、ヤン・ペルニクが、サルモネラ菌のたかったソーセージを食ってしばらく働けなくなったときに訪れた。ヘンリクは友人のこの災難を本人にかわってチーフ・メッセンジャーに報告し、ついでに食中毒を結核に昇格させて、まんまとペルニクの後釜にすわった。それから下宿をかわり、新しい制服を着て、友人を一人失ったかわりに職を得た。

二〇年代はじめに彼が届けたメッセージの大部分は〝買い〟だった。株価急騰の時期だったこともあって、それらの指示に対する反応も速やかだった。ヘンリクはろくな才能もない

人間が一財産作るのをしばしば目のあたりにした。だが彼自身はあくまで傍観者でしかなかった。自分のサラリーでは一生かかっても稼げない金額を、取引所でわずか一週間のうちに稼ぎだす連中のほうへ、彼は本能的に惹きつけられていった。

彼は株式取引所のしくみを勉強しはじめた。人の話に耳をそばだて、メッセージを盗み読み、どの会社の報告書を研究すればよいかを知った。十八歳までにウォール・ストリートで四年間の経験を積んでいた。大部分のメッセンジャー・ボーイにとっては、混雑するフロアからフロアへと歩きまわって、ピンクのメモ用紙を届けるだけの四年間が、ヘンリク・メテルスキにはハーヴァード・ビジネス・スクールの修士号にも匹敵した。かといって、将来この権威ある大学で講演する日がくることを、当時の彼が知っていたわけではない。

一九二七年七月のある朝、彼は老舗の株式ブローカー、ハルガーテン・アンド・カンパニーからのメッセージを届ける途中、いつものように回り道をしてトイレに寄った。トイレの仕切りに閉じこもって渡されたメッセージを盗み読み、その内容が自分にとっていくらかでも価値あるものかどうかを判断し、価値ありと判断したときは、同胞相手に小さな保険代理店をやっている年老いたポーランド人ヴィトルド・グロノヴィッチに、電話でその内容を伝えるというシステムを作りあげていたのである。ヘンリクはこの内部情報提供によって週二十ドルから二十五ドルの余禄を見込んでいた。グロノヴィッチは市場に大金を投じるほど懐ろが暖かくなかったので、若い情報提供者が情報リークを疑われる気づかいはなかった。

便器に腰かけながら、ヘンリクは自分がかなり重要なメッセージを読んでいることを認識

しはじめた。テキサス州知事が、スタンダード・オイル・カンパニーにシカゴからメキシコにいたるパイプラインの敷設を認可する予定で、すでにほかの関係公共団体はすべてこの申入れに同意している、という内容だった。株式市場では、スタンダード・オイルがほぼ一年前からこの最終認可を得るために努力していることは周知の事実だったが、知事は申請を却下するだろうというのが大方の観測だった。メッセージはジョン・D・ロックフェラー二世の株式ブローカー、タッカー・アンソニーに、直接至急に手渡されるべきものだった。このパイプラインの認可は北部全域における石油の入手をいちじるしく容易にし、当然のことながら利益も増大する。つまりこのニュースが公表されれば、スタンダード・オイルの株価が市場でじりじり上昇することが、ヘンリクの目にも明らかだった。ましてやスタンダード・オイルはすでにアメリカの石油精製所の九〇パーセントを支配していたのだからなおさらだった。

ふだんならヘンリクはすぐにこの情報をミスター・グロノヴィッチのもとへ送っていただろうし、現にそのつもりで外へ出ようとしたとき、ふと、やや肥満気味の男が、トイレから出て行きがけに、一枚の紙きれを落したのに気がついた。ほかに人がいなかったので、ヘンリクはその紙きれを拾ってもう一度仕切りのなかに戻った。せいぜいこれも新しい情報の一つだろうぐらいに思いながら。ところがそれはミセス・ローズ・レンニックなる婦人が振出した額面五万ドルの小切手だった。

ヘンリクの頭脳はめまぐるしく回転した。足が地につかなかった。大急ぎでトイレからと

びだし、間もなくウォール・ストリートに立っていた。それからレクター・ストリートにある小さなコーヒー・ショップに入り、腰をおろしてコカコーラを飲むふりをしながら、慎重に計画を練った。続いて行動に移った。

まずウォール・ストリートの南西側にあるモーガン・バンクの支店で小切手を現金化した。取引所のメッセンジャーのスマートな制服を着ているから、相手はどこかのれっきとした会社の使い走りと見てくれるだろうという計算があった。それから取引所へ戻って、場内ブローカーからスタンダード・オイル二千五百株を一株十九・七八ドルで買い、手数料を差引いて百二十六ドル六十一セントを手もとに残した。残額はモーガン・バンクの当座に預けた。やがて、脂汗がにじむほどの緊張のなかで知事の発表をいまかいまかと待ちながら、ふだんの日と同じように夕方まで働いた。スタンダード・オイルのことが気になって、トイレに寄り道してメッセージを盗み読むことも忘れるほどだった。

発表はなかった。知事自身がいたるところでその汚れた手の届くかぎりの株を買いまくるために、午後三時の取引所の閉場まで発表を押えていたことを、ヘンリクは知るよしもなかった。ヘンリクはその夜とりかえしのつかない過ちをおかしたことに茫然自失しながら帰宅した。仕事はおろか、過去四年間に築きあげてきたすべてを失う自分の姿が目の前にちらついた。下手をすると刑務所入りさえ免れないかもしれなかった。

その夜は一睡もできず、窓を開けても風の通らない小さな部屋でますます落ちつきをなくしていった。午前一時にはとうとう我慢ができなくなって、ベッドからとびだし、ひげを剃

り、着替えして、地下鉄でグランド・セントラル・ステーションへ向った。そこからタイムズ・スクエアまで歩いて、震える手で《ウォール・ストリート・ジャーナル》の第一版を買った。紙面から全段抜きの大見出しが声を大にして呼びかけていたにもかかわらず、そのニュースがよく呑みこめなかった。

知事、石油パイプライン敷設権を
ロックフェラーに認可

そして小見出しは、

スタンダード・オイル株
大商いの見込み

とあった。

ヘンリクはいちばん近い西四十二丁目の終夜営業のカフェまで歩き、大きなハンバーガーとフレンチ・フライを注文して、電気椅子に送られる囚人が最後の朝食をとるように貪り食った。ただしこの場合は、大金持への道を前にした最初の朝食だった。彼は第一面のロックフェラーの成功に関する詳細な記事を貪り読んだ。記事は第十四面にまで及んでいた。それ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com